

モンテッソーリ教育とコスミック理論

保田 恵莉*

滋賀短期大学 幼児教育保育学科

Montessori Education and Cosmic Theory

Eri YASUDA

Department of Early Childhood Care and Education, Shiga Junior College

Abstract: What is Cosmic Education? The basic thesis of Maria Montessori theory of cosmic was that there was unity throughout the universe. The universe does not exist by chance. It was created by a rational reason that maintained a certain order. The cosmic theory of Montessori education is theological and there is God as the founder of the universe. Moreover, Montessori says there is harmony in the sacred universe. Both living things and inanimate objects support each other in the universe. Infants must develop congenital potential to further evolve education. This theory is familiar to Montessori education. At the same time, the cosmic theory argues that it would enable the formation of human beings within Montessori education. In this paper, I would like to discuss the point of contact between Montessori education and cosmic theory and its potential for developing it into a new education.

キーワード:モンテッソーリ教育, コスミック理論, 人間の形成, 神聖なる宇宙

Keyword: Montessori education, cosmic theory, Human formation, sacred universe

1. はじめに

日本の国では、子育てに苦悩し、解決の策が見つからず、我が子に手を挙げてしまう Child abuse(こども虐待)が年々増加している。それまでに至る不適切な親の関わりは社会福祉専門員の間では Maltreatment(マルトリートメント)と言われ、全てを否定するのではなく、親の心を汲み取りながら相談できる窓口も多数

出来てきている。

しかし、幼い頃に虐待を受けて育った人間は、自身の傷が癒えないまま親になり、虐待は時代を超えて繰り返されていることも事実である。このような人間の育ちの背景に、乳幼児教育で重んじられる人間の形成はどのようにつくられていくのだろうか。

* E-mail: e-yasuda@sumire.ac.jp

様々な感情を抱き人や自然を愛する心をこどもの頃に持たなければ、どのような大人になってしまうのか。

イタリアの医学博士 **Maria Montessori**(マリア・モンテッソーリ, 1870-1952) により発展したモンテッソーリ教育は, 世界各地に広がり, 世界中の国々に約 22, 000 校の **Montessori School** を数えるまでになった。

特に, 全ての国の人権を第一に守るべく活動している **AMI** (**Association Montessori International**) 国際モンテッソーリ協会の営みにおいては, アジア, 南アメリカ等にある発展途上の国々におけるモンテッソーリ教育の普及が挙げられている。さらに, 9 年前のモンテッソーリ世界大会 (**Montessori International Congress**) では大会テーマに “ **Guided by Nature** ” が挙げられ, コスミック教育を中心に論議がなされている。当時, マリア・モンテッソーリは, 宇宙と人類を関連づけて話をした。果てしないコスミック (宇宙) には無数の銀河が流れ, 光と水が輝いている。月にはウサギが住んでいる。と, こどもが想いを寄せることをモンテッソーリ教育では乳幼児期に必要な「感性」と「創造」という言葉でこどもに深く共感している。

神聖なる果てしないコスミック (宇宙) をマリア・モンテッソーリは, どのように捉えていたのだろうか。

モンテッソーリ教育におけるコスミック教育は, 理念, 内容の面から, **ESD** (**Education for Sustainable Development**) と言われる持続可能な開発のための教育を抱合している。持続可能な社会の実現のため

には, 全ての人が暮らし方や社会の仕組みを持続可能なものに換えていく必要がある。これらの思想はキャリア教育, 障害者支援教育とも重なるところが多く, これらに関連付けることは, 今日の教育課題に迫る上で大変意義深い。モンテッソーリ教育の開拓者であるマリア・モンテッソーリは, 史上初の女性医学博士としてこどもの発見を重んずる新たな思想を提唱し, 世界的にその貢献を讃えられた。

我が国ではモンテッソーリ教育のほとんどが就学前の0歳から6歳までの子どもたちに向けた教育であり, 乳幼児教育と同じく, 0歳からの発達と乳幼児期のこどもの可能性を告げている。この0歳からの教育の重要性に反して, モンテッソーリの提唱したコスミック教育は小学校の学童期以降であることの差異が生じていることに不思議を感じるが, **ESD**の視点から, 乳幼児期・学童期における未来に繋がる教育への示唆を得ることを目的とし, モンテッソーリ教育におけるコスミック (宇宙) 理論を考察することにした。

2. コスミック理論と生命

マリア・モンテッソーリは, 宇宙とその一部である地球の進化を研究する科学の心を持ち, こどもの生命を重んじた。すべての生物種は共通の祖先から長い時間をかけて, 自然選択のプロセスを通して進化している。イギリスの自然科学者であるダーウィン (1809-1882) が 5 年にもわたる航海と調査をもとにしたためたものが生命を根底に置いた「種の起源」である。ダー

ウィンは、地質学や生物学に卓越した知識を持ち、進化生物学の「種の形成理論」を世に発表した。「種の起源」とは、地球上にはさまざまな生物・種が存在しており、それは絶えず生存を続け、進化し続けるものだけが生き延びるといった内容である。しかし、19世紀当時はキリスト教の影響が強く、「神」の信仰が主流であったためダーウィン同様、モンテッソーリ思想では、宇宙を神学と捉えたものの人々には理解され難く、共感を得られることはなかった。

2-1 コスミック教育とは何か

人々に宇宙の神学説が理解されなかったことをマリア・モンテッソーリは少しずつ明確なコスミック理論に結んでいった。コスミック教育とは果たして何か。

M. Montessori 吉本二郎・林信二郎 共訳（1997）『モンテッソーリの教育・六歳～十二歳まで』の一説において、「こども自身が宇宙全体には統一的計画が存在している。生物の多様な形態の存在のみならず、地球そのものの発展進化もそれに依存していることを自己レベルで学習し認識することである¹⁾」と述べられている。

マリア・モンテッソーリのコスミック（宇宙）に関連する理論は著書からの教えの如く、時間と空間に条件づけられた統一的計画が広大な宇宙全体に存在する。マリア・モンテッソーリは、宇宙は無秩序な混雑したものではなく、また、偶発的に出来上がったようなものでもなく、宇宙は自然的な秩序が保たれ統一的であり、合理に至る理性により計画され創られた存在であ

ることを述べている。

また、モンテッソーリ教育では、さまざまな宗教、社会的階級、人種などの違いを超えて、子どもたちの心に届く教材が大自然の恵みそのものであることを伝えている。さらに、モンテッソーリにとって、最善であることは、こどもに正しい教育を行うことであり、正しい教育とはこども自身に生まれながら与えられている様々な活力溢れた未知なる能力を用いて仕事（遊び）を通し、社会的な自己実現をすることにある。

0歳からの乳幼児に自己実現のためにも天地の恵みに気づかせるには、コスミック理論をモンテッソーリ教育の創造と合致させることが必要にも感じられる。

次に、マリア・モンテッソーリは、コスミックの進化について、次のように述べている。

「生命は神秘的なものである。進化していくことは、変化によるものではありません。統一的なコスミック計画により前進していきます。生命の意義は進歩に向かって完全で無限な道を進んでいくのではなく、むしろ環境に影響を与えながら、環境の中で一定の目的を達成することにあります²⁾」

今、一人ひとりの個性と発達に応じた深い観察を重んじるモンテッソーリ教育が生命を神秘で尊いものと捉え、生命の重要性を重んじたことと同じように、日本の国でも、幼い頃からの乳幼児の「人格形成の

確立」を求めている。ESDの思考が中央環境審議会でも意味付けられた2008年には、同年改訂の「幼稚園教育要領」「小学校学習指導要領」及び「中学校学習指導要領」において、「持続可能な発展のための教育（持続発展教育）」が教育内容に明確に位置づけられた。

現在の日本では、2019年教育要領再改訂とその後の実施を受け、人々が地球で直面する課題を解決するための教育を通し、持続可能な社会を支える人を養うというESDの理念が果てしない宇宙を視点に置き夢を育む就学前教育や質の高さを位置付ける義務教育に生かされようとしている。

2-2 コスミック(宇宙)における人間の位置付け

どのような教育も、教師のものの見方や考え、そして教師が何を大切に一日を生活しているかという心の在り方から始まっていく。人間の位置付けにおいて、マリア・モンテッソーリは、コスミック教育もESDも、地球環境やそこに住む生命やその歴史などをどう見るかという教師の影響が大きいことを述べている。

マリア・モンテッソーリにとって人間の「幸福」とは何か。また、地球の「平和」とは何か。多くのモンテッソーリ著に出会いながら今もなお考え続ける。それは、単なる政治的経済的な事項ではなく、社会福祉のみを取り込んだことでもなく、人類の全てを含む人間学的なものであり、コスミック(宇宙)へ発信される教育思想ではないか、と考えた。

2002年2月、日本モンテッソーリ学会における「実践研究・論文」の一つに江島正子氏の「モンテッソーリにおけるコスモス(宇宙)」の報告があり、その冒頭の一説「私の祖国は太陽の周りを回り、地球と呼ばれる星です」という記述に出会った。

同時に、“Guenther Scultz-Benesch, *Der Streit um Montessori*. 2. Auf., 1962. Herder. S. 160. *Meine Heimat ist ein Stern, der sich um die Sonne schwingt und Erde genannt wird*”及び、マリア・モンテッソーリ著クラウス・ルーメル江島正子訳(1996)『こども-社会-世界』の文献からさらに文献研究を探究する内に、マリア・モンテッソーリが1950年代に至るまでの数回、インドに置いて「コスミック教育」について講演を行なっていることがわかってきた。第2次世界大戦後のモンテッソーリの書き物には、自身が考察する「宇宙理論」について、また、コスミック教育観に関して述べられている。

マリア・モンテッソーリは宇宙の神聖に基づく人間の位置をどのように捉えていたのだろうか。

「神が生物を知性で動かす際に、神聖な宇宙は人間に知性そのものを与えた³⁾」

マリア・モンテッソーリは、このように表現しながら人間を他の生物とは違っている。人間は生まれながらに神から「知性」を得ており、それは他の生物と全く異なるものである。ということを告げている。「異なる」という区別の考え方として、もちろん人間は宇宙における神による被造物であるには違いはないが、他の生物と異なる精神を宿しており、人間には世に生まれた

瞬間に特有の発達を与えられている。そして、こどもは、生命の誕生のその時から、周囲の世界と出会い、それらの一つひとつに触れながら様々な事象を吸収していく。こどもの視線は観察をし続けるために伴う運動や自然に身を委ねる心地よさへの体験を通じて少しずつ確かな瞳と心が形成されていくことをマリア・モンテッソーリはモンテッソーリ教育の内側から見つめ、喜びにした。

その後、モンテッソーリは、宇宙を支配している幾つかの法則は、こどもにとって興味深く、また、驚くべきものであり、それらは法則の内にある事象よりさらに奥深く興味深いものであると述べている。

モンテッソーリ教育の目的は、単に子どもに理解させることや記憶を強要するこ

とにあるのではなく、こどもの内側に秘められた核に対して、自分を熱中させるよう、子どもの創造力に影響を与えることであった。マリア・モンテッソーリは、こどもの心を理解し、周囲に広げることができるように地球上の生き物と事象を一つの統合的な観点から眺望するコスミック教育の必要性を訴えたのである⁴⁾。

そして、コスミック教育では人間が属する人類学を重んじ、宇宙における人間の位置から人間は特別な存在であり、人の生命は自然の中で最大の奇跡であることを語っている。人間としての特権に対する感謝と愛が教育プロセスとしてモンテッソーリ教育の中に息づいている。次にコスミック教育と理論の全体像を作図にして示した。(銀河:注2)

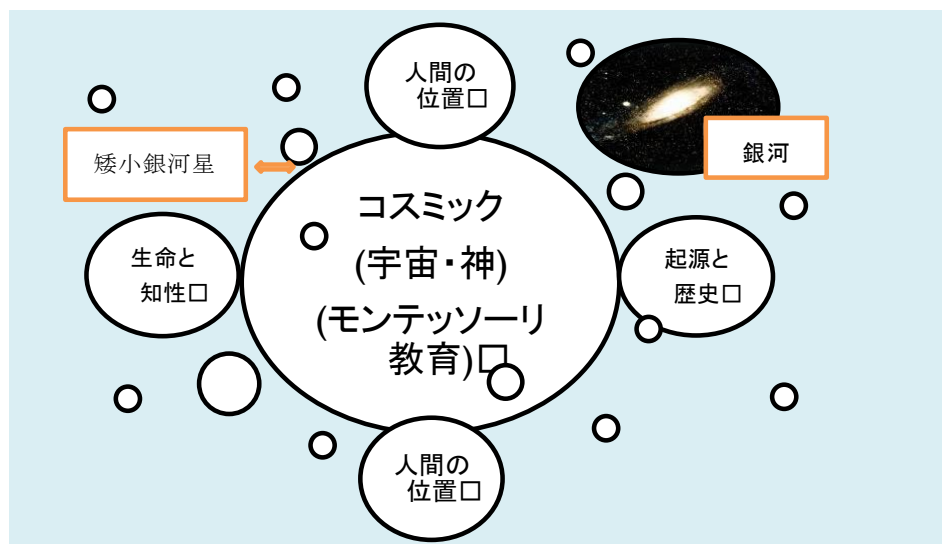


Figure 1:モンテッソーリ教育とコスミック理論を示す全体像^{注1}

注1: コスミック教育は神学的要素を持つモンテッソーリ教育に取り込まれている。モンテッソーリ教育は人間の位置を安定地に置き、果てしなく長い起源と歴史のなかで生命と知性を重んじながら未知のこどもの新しい感性と創造を育てている。

注2: <https://ja.wikipedia.org/wiki/アンドロメダ銀河>

さらに、マリア・モンテッソーリは、文部科学省日本ユネスコ国内委員会：持続発展教育(2008) (ESD: Education for Sustainable Development) の発刊において次のように語った。「人間は直立歩行をするが、乳幼児の時代に自分の周囲に二本足で歩く人間を見ることは重要である。乳幼児が立って歩いている人間を見ないとするならば、そのこどもは直立歩行をしないであろう。例として、「狼に育てられた少女」と仮定されるアマラとカマラが存在する⁵⁾」。(アマラ、-1921年9月21日)とカマラ、-1929年11月14日)は、1920年にインドのミドナプール付近で狼とともに暮らしているのを発見された二人の少女であり、キリスト教伝道師ジョセフ・シング牧師によって保護された。シングは幼少時に親に捨てられた少女たちが狼の母親に育てられたと発表し、文明から切り離されて育てられた人間(野生児)の事例として有名な逸話となったが、その後の調査で疑問点が多々指摘されており、現在は「実の親にある程度まで育てられた自閉症児が捨てられたのではないか」との説が有力視されている。

日本においては、1955年に翻訳出版された『狼にそだてられた子』(アーノルド・ゲゼル著、生月雅子訳 家政教育社)によってこの逸話が紹介され、教育や児童心理学の分野で度々参考にされている。

牛や馬や羊は動物として生まれる。生まれてからすぐに立ち上がり歩き始める姿を見ることが出来る。しかし、人間の場合は直立歩行するには一年余りの時が必要となるのである。人間の筋肉は本能に従わ

ない。人間一人ひとりには先天的に与えられた運動エネルギーを使わなければ動くことが出来ない。例えば、3歳になるこどもは足をしっかりと地面につけて歩くことができるが、2歳のこどもの歩行はまだ危なげである。このように地球上の人間の未熟さは愛しいものであり、尊いものであることをマリア・モンテッソーリは自身の中で慈しみ、宇宙に向ける人間の位置を哲学の世界から創造した。

3. ファンタジーとコスミック理論

マリア・モンテッソーリが生存したイタリアでは、親子関係に児童文化が息づいている。イタリアでは、「クレオ」や「ピノキオ」のような童話から読み取れるように、こどもの行動に親が手出しをすることは一般的なことであった。できる限りこどもに自分のことは自分でさせる。というようなこどもの自主性を尊重することよりも、親が選ぶ。親の意見をこどもに注ぐことに趣が置かれた。さらに、「イタリアのグリム童話」と伝えられる「赤ずきん」のヴァリエーションでは、狼お爺さんにフライパンを借りるため、お母さんに作ってもらった美味しいお菓子を持って出かけたが、お腹が空いていたため、赤ずきんが道中で全部食べてしまい、そのことを知り、怒った狼お爺さんに赤ずきんは頭から食べられてしまう。という現実的作品が残っている。

イタリアで作られた童話のファンタジーとは、このようにリアルの要素が強く、視覚的現実的なものが多いようである。イタリアルネサンスにおいては、彫刻・建築・

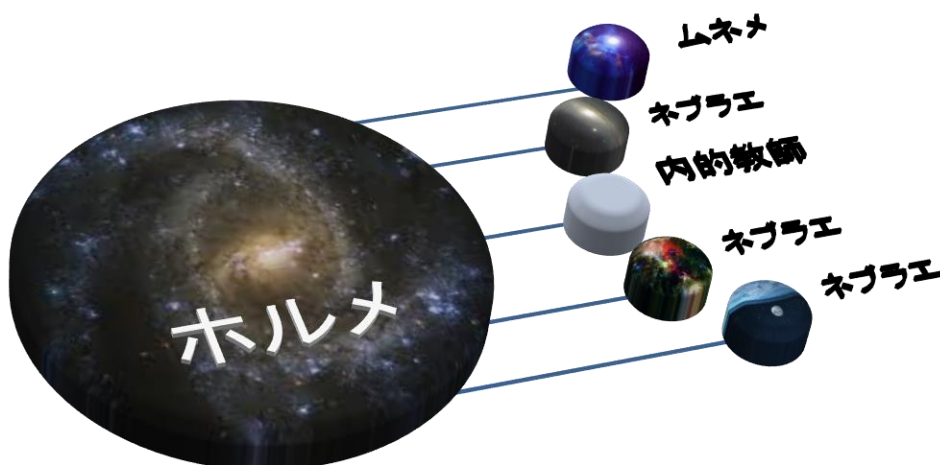
絵画・オペラ等の眼に見える分野でのファンタジーはダイナミックで素晴らしいものであったが、反面、眼に見えない宗教に包まれていたという一説もある。

マリア・モンテッソーリは、一見派手なパフォーマンスの広がりを見せるイタリアのファンタジーを積極的に支持しなかった。イタリアで設立された「子どもの家」は今年で116年にもなるが、設立された初期の頃からの人形劇や劇遊びでは地味で素朴な印象を受けるが創造性を大切にされていたことは間違いない。それゆえ、障害を持つこどもの気持ちに寄り添ったモンテッソーリ教育からは、創造的な意味を持たないイタリアのファンタジーは、イタリア語のファンタジー (fantasia) による幻覚的思想は共感されなかったのであろう。モンテッソーリ教育ではこどもの生活とこども自身を土台にして発展させていく想像力 (immaginazione) に視点が当てられていたと考える。

さらに、この研究にあたり、文献調査以外にコスミック理論を定義づけた実践的查がある。2016年8月、『銀河のはなし』と

いうタイトルで、当時「京都大学理学研究科(岡山天文台)」より研究者：松林和也氏を招き、県立但馬文教府講義室を会場にして子育て支援室「こどものアトリエばら園」で保護者と保育者対象の講演を実施した。松林氏は、現在「せいめい望遠鏡の可視光多色同時撮影カメラを用い重力波源電磁波対応天体探査」(2020-2022)天文学研究課題に取り組んでいるが、講演では「可視光面分光観測で探る近傍極矮小銀河の星形成」(2014-2017)を基に、宇宙の矮小銀河の星を画像で紹介しながらコスミック理論が述べられた。

人間は神より知性を与えられているが、コスミックの使命を意識してはいない。紀元前、自然に依存していた人間はそれだけでは足りず、もう少し完全を得ることはできないか。と、欲を持ち、多くを求めた。そして、人間は自然だけでは満足せず自然を超え、いろいろなものを造り始めた。さらに、人間は広大な宇宙からも新しいものを創造していくことを考えた。



当時、松林氏の講演『銀河のはなし』からは、今まで出会ったことも見たこともない空の向こうの神秘を身近に感じる時間を得た。宇宙の営みを、銀河の世界を、不思議に思う心、暗闇を手探りで歩くようなもつと知りたいと思う心、宇宙への仕組みへの直観を人のなかに取り込みながら、我々は一時神聖なるコスミックの調和へと導かれた。望遠鏡の可視光多色同時撮影カメラを用いた重力波源電磁波対応天体における天文学研究課題は研究者松林氏にとって国立大学の期待を担う現実的な調査である。しかし、彼はこの講演の中で、月を観るとそこにはウサギが餅つきをしている。と想像するこどもを教育で育てることの尊さを語った。非現実的な妄想ではなく、そこには内的教師の慈しみと親子の絆を感じ取れる。人間は誕生の0歳～幼い時代に自然に生まれる夢とファンタジーが精神分野に存在しなければならない。そして、大人になってからでは間に合わない何か大切なものが、「人間がなぜこの世界に存在しているのか。」という疑問を持つことから教育的意味を持つ解答に繋がっていくのではないだろうか。

マリア・モンテッソーリは、晩年インドを訪れ東洋思想から影響を受け宇宙観としてコスミック理論を具体化していった。理論と同時にコスミック教育理念に基づいて、それぞれの国や地域の文化的背景に沿ったモンテッソーリ教育を展開するための適応を重視した。子どもの人格を尊重し、可能性を引き出すためのモンテッソーリ教育を様々な国と地域に普及させるにあたり、その土地の人々と協働で行うことに趣を置き、決して先進国の価値観を強要するのではなく、原理を大切にしつつもそれぞれの文化や歴史的風土に合った変革を行うことを意義付けた。高価と印象付けられるモンテッソーリ教具においても、質の高いモンテッソーリ教具が整わないと教育ができないと捉えるのではなく、その土地の文化や自然こそ生きた教材として用いる独自のコスミック教育教具を創造すること。それらの適応性を主張し、それをまさに実践してきたのである⁶⁾。コスミック教育では、人類が地球で直面するさまざまな課題を解決するための教育を通した持続可能な未来を創造する力を育む、地球市民のための学びを感じ取れる。

Figure 2 : コスミック教育による内在的生命エネルギー(左頁)

作図による「コスミック教育による内在的生命エネルギー」においては、銀河のホルメ・ムネメ・ネブラエの誕生と中心に、また、ホルメの一番近くに位置する内的教師である人間の位置を示した。『注3: 作図 左→右』

注 3: ・ホルメ <https://www.pinterest.jp/pin/794181715512514836/>

ムネメ <https://ja.wikipedia.org/wiki/アンドロメダ銀河>

ネブラエ「Galaxy Zoom Spiral - Nasa」動画素材(ロイヤリティフリー) 8609923 | Shutterstock

ネブラエ「Flight Through Universe with Galaxies」の動画素材(ロイヤリティフリー) 4669034 |

Shutterstock ・ネブラエ「Traveling Towards Beautiful Galaxy」動画素材(ロイヤリティフリー)

[12055676 | Shutterstock](#)

4. コスミック教育のささやかなる実践

4-1 こどもの体験「聖書のお話」から

2016年8月のこの出来事から、2020年6月までの6年間、毎年梅雨季から夏にかけてこの貴重な講演を基礎に、こども達に支援室の教諭が宇宙のはなしをするが、その際一冊の絵本を「子育て支援室こどものアトリエばら園」のこども達に読み聞かせ、コスミックについて、ファンタジーを絵に表現している。子育て支援室では、幼児を含めて「聖書のおはなし」をこども達に語り継ぎ、生命の恵みの喜びを共に体験するコスミック教育を編成することをねらいにした。

M. Montessori 吉本二郎・林信二郎 共訳 (1997)「モンテッソーリの教育・六歳～十二歳まで」では「生命に対する深い洞察は創造主の計画に沿って秩序と調和に導かれ子どもたちの内面から開花する性質のものである⁷⁾」。と伝えられている。

ここでは、こども達を対象としたこの実践について、2009年11月、財団法人キリスト教視聴覚センターから発刊された「聖書のおはなし^{注2)}」旧約聖書、創世記1:1～2:3(文:小塩節・小塩トシ子、絵:永田萌)を具体的に下記に記す。(注2: イラストレーター永田萌氏の挿絵が美しく、こども聖書と優しさを伝える絵本である。コスミック調査ではモンテッソーリ園でも活用されている)

「世界のはじまり」

『一番はじめに神様は天と地をお造りになりました。この宇宙です。それまでは何

もなくて真っ暗でした。神様は「世界をつくろう」と考え、「光よ、あれ」と言いました。すると、光があらわれ、神様は「よし」とお考えになりました。天と地をおつくりになった一日目です。次の日、神様は大空と水を分けました。私たちの地球です。三日目。水のないところに草と木を生えさせました。次の日、草や木がよく育つようにお日様が照ようにし、夜は空に月と星をつくりました。これが四日目です。(略)六日目には土の上に虫や獣もつくりました。そして、最後に神様は私たち人間をおつくりになりました。一日目、二日目という風に言いますが、天地をおつくりになった毎日は、私たちが知っているに二十四時間ではなくて、途方もなく長い、長い間のことです。そして、七日目は神様のおやすみ。神様は何もかも、みんな、「とても良い」と、お考えになりました。』

子育て支援室での6年間の実践からは、コスミック理論の根底に潜む神・空を思い浮かべるこどもが多く、天地創造のテーマをもとに、物語を空想して絵に描いた。2016年度は「こどものアトリエばら園」年中クラスの幼児12名を対象に実践し、2017年度は、年中クラスの幼児12名を対象に実践の絵を描いた。幼児は、年少年長のこどももいるが、後に調査する児童と一定の年齢差があり、感性表現の充実期である年中クラスの幼児を対象に選んだ。2018年度は年中クラス全ての幼児20名を対象を拡げて実践した。2019年度は児童クラスの児童7名(1年生から6年生)を対象に実践

し、2020年度は同じく児童クラス7名全員を対象に実践の絵を描いた。2021年度は、幼児クラスと児童クラス合同で実践を行った。実践に関わり教師は「聖書のはじまり」の物語のイメージが湧くような語りをしていたが、予想していた「一日目」から「七日目」の語りを絵に表現するのではなく、対象のこども達は宇宙を銀河の世界と捉え、そのなかでも年毎には違いがあるものの、『宇宙の光・月のウサギ・悪魔・天使・宇宙のこども』をテーマに描いた。天使・悪魔の絵を描いた時には、聖書のお話を具体的に構築して話をしてくれたこどもも生

まれた。その際、教師による提示と子どもたちの様子及びこどもの交わりや主体的な活動の様子は、教師の観察とカメラを用いて記録し絵画を参考に、宇宙をどう捉えているか。何を感じたのだろうか。(主体・文化的視点)・生命との交わり・コミュニケーションの育ち(神学・共生の視点)・教師の関わりと心の表出(愛情・慈しみの視点)に視点を当てて考察した。作品数としては、6年間の実践で202枚の絵を残した。調査分析をし、その内の8点(写真1～8)※を本論文の結果に取り上げている。



(写真1： 銀河の光)2016. 8月



(写真2： 銀河の光)2017. 8月



(写真3： 銀河の光)2018. 6月



(写真4： 銀河の光)2019. 7月



(写真5: 月の兎) 2019. 7月



(写真6: 月の兎) 2020. 6月



(写真7: 天使) 2021. 6月



(写真8: 悪魔) 2021. 6月

※児童の絵に関する写真(1～8)はすべて著者撮影によるもの。使用許可を得て掲載。

・宇宙は銀河の世界。光は希望を意味している。写真1は、光の花を描き、写真2は、星と虹色の宇宙を描いた。

・生命は神から授かったもの。コミュニケーションは粒と語った。

・宇宙ロケットの世界。筒型ロケットや円盤は出発を意味している。写真3は、自分と友達を乗せたロケットを描き、写真4は、銀河に送る犬を描いた。

・月夜に兎の集会。写真5は、月に咲く小さな花を見て喜ぶ兎たち。・写真6：月の世界では病気を治す兎は薬になる神様の葉っぱを食べる。共に、空想を楽しんでいる。

・洗礼を受けた後にイエスは荒れ野に行き、40日間の断食をする。何も食べずに心の中を見つめていると、悪魔がやってきて言う。「神の子ならばこの石をパンに変えて食べないか。」天使の姿になったイエスは答えた。「人はパンのためだけに生きるのではない。神の語る一つ一つの言葉を食べて生きるのだ。」（「聖書のおはなし」pp. 76-77:

マタイによる福音書1-4）写真7・写真8は、こども自身が感じた物語のイメージをそのまま絵に表した。

どの作品も教師から優しさを受け取り、自己の心の表出をしている。色々な画材（クレパス・絵の具・色鉛筆・コンテパス等）を使って描いている。

4-2 こどもの体験 「暗闇から光が発せられる」

コスミック理論に基づく次の実践では、

キャンドルの灯を感じながら一定時間宇宙を構想する暗闇のなかを歩いた。（研究調査ではコスミック体験として「暗闇を歩くこと」は幾つかの事例がある。本研究では、それらを参考にしながら、幼児や障害を持つこどもが安心して体験に臨めるよう、「4本の明るい光」を用いた）



（写真9：宇宙の暗闇と灯火）

実施：2018.6月・2019.7月・2020.6月・2021.6月

閉じた目を少しずつ開いて部屋の片隅のテーブルに置かれたキャンドルの灯りを感じることから美しい光が生まれる。という光の誕生の瞬間を体でも感じる事ができる構想を大切に扱った。「宇宙はどんな感じがしますか?」「どんな光が見えるのでしょうか?」と、言葉掛けを教師が行うことから一層闇を不思議に感じる事ができたようであった。

2019.7月、2020年6月には児童2名（8歳・9歳）が車椅子で活動（体験）に参加した。実践を通してこども達はキャンドルの灯りにそっと手を翳し、「暖かくて嬉しい」と喜びを表現し、「綺麗だ。なんだか優しい気持ちになってくる」と、言葉を発した。

5. 0歳からの自己形成

いま、こどもが生きる世界で様々な問題が起こり、人間は困難な世紀に存在している。人類の自己救済のためのコスミック教育は、モンテッソーリ教育に内在する理性と良心を調和的に総合する理論が重要に思う。そして、0歳から自己形成をすることは、無知・欠落から脱し、心理的逸脱と無学から解放されなければならない。赤ちゃんは誕生の直後から内的衝動に従い自己形成を行う。そのことについて、マリア・モンテッソーリは1937年にデンマークのコペンハーゲンで開催された国際モンテッソーリ大会で連続講演を行っている。第4講演でモンテッソーリは道徳とはそもそも何であるかを問いかけた⁸⁾。乳児から自己形成を求めるのであれば、道徳の概念は様々な法律を超えるようなものではない。それらはモンテッソーリ教育の根本理念の基調を成すだけでなく、宇宙における人間の位置付け、Cosmosという自然界と人間の共生関係を視野に入れた世界平和を目指すものであるからです⁹⁾。その後、マリア・モンテッソーリは乳幼児期とは愛に出会う時期であることを、1946年ロンドン・モンテッソーリ教員養成コースの講話で述べている。「子どもの生命の喜びは、愛し合うことに依存する¹⁰⁾」「幼い子どもは内的現実を意識する。大人はその手助けをしなければならない¹¹⁾」。生活に尽きることはない愛と保護を楽しみ、こどもは未来に向かって人類宇宙をどう捉えていくか。この主体的文化的視点は生命との交わり・コミュニケーションの育ちによる神学・共

生と混じり合い、周囲の大人との関わりから愛情と慈しみを備えていくものと考ええる。もっと知りたい、学びたいと思うこどもの気持ちは、宇宙の誕生から今この時まで繋がっている。光があり、水があり、空気があり、生き物がいて自分たちがいることをこどもはこどもなりに感じて大人になってほしい。宇宙への憧れや知識だけでなく、自然の神秘、生命の不思議、その尊さ、自然的秩序の存在、人間を超えた存在への驚きや感嘆や賛美をモンテッソーリ教育はコスミック理論を通して気付かせていった。

6. 新しい教育への発展

ユネスコの取り組みにおいては、2019年以来、多様な文化を基礎的概念として位置づけ、その上で、教育・環境・地域社会において取り組むべきことが強調されている。また、公平な意欲的インタラクティブな教育システムを可能とし、それにより基礎的要素である文化要素の多様性を尊重し、品位を持ち持続可能な社会づくりを支える人材を可能とするような仕組みの構築が喫緊の課題であり、共生の価値観が機動力を発揮することが期待されている¹²⁾。神から与えられた知性と人間が作り上げた文化をマリア・モンテッソーリは「超自然＝文明(civilization)」と名付けている。しかし、知性そのものを与えられた人間は現在も「超自然」の環境を整えられずにいる。

マリア・モンテッソーリは全世界が1つの国家となることを論じた。それは、自由

になるということではなく、抑圧されることでもなく、どこかで何か問題が起こったとき、全ての人がその問題を感じる。という願いを意味している¹²⁾。

日本では、平成から令和の年への移行と同時に、文科省から「眼の前の個々のこどもが教科書である」と新しい教育要領、保育実践を巡る評価の視点が見直された。提示された「幼児期までに育ってほしいこどもの姿・10の力（教師の願い）」のなかでも、大学での筆者の担当科目「領域指導法 人間関係」においては、道徳心・規範意識の芽生え、自立心、協同性、社会生活との関わりの4項目が重点となるが、このどれもがコスミック理論に深く結びついていることに気付いた。

コスミック教育は本来発達上想像力が最も活発に働く小学生に基準を置いて行われることが多いが、イタリアではそれ以前の乳幼児の保育現場で取り入れられる。それらに伴い、0歳からの教育の尊さは我が国でも再確認されている。

H. エルスナーの『モンテッソーリのコスミック教育』には3歳から就学前までのこどものコスミック理論と実践が掲載されている。グローバルな思考を持つ科学者は、人類に生態学的環境を意識づけ、宇宙における生命が相互に依存していることを研究している。

モンテッソーリ教育の目的は、こどもへの愛に裏付けされている科学的知識を基礎にして、宇宙の歴史・生命の起源・人間の登場・人間生存の根本的ニーズをマリア・モンテッソーリの神学を重んじたコスミ

ック教育のカリキュラムに組み込むことにある。

7. まとめ

モンテッソーリ教育が語る「未知の可能性を持つこども」は、広大な宇宙を前に満たされることのない大きな好奇心を生涯持ち続けることができるであろうか。空を見上げながら宇宙の中での人間の役割とは何か、自分自身の使命とは何かを問いながら生きていくことを願いながら、本稿を書き上げた。思い起こせば筆者自身は、幼少時代、月の兎に喜びを得たこどもの1人であった。その背景には両親の愛と慈しみが深くあったことを改めて感謝する。コスミック教育には今、時代が求めている生涯学習に繋がる学び、人間形成の基礎を培う教育への示唆が多く存在する。加えて、マリア・モンテッソーリが基本にしている「教師が何を考え、何を大切に生きていくか。」が非常に重要である。本研究を通して教師の謙虚に学ぼうとする姿勢、何事にも興味関心と意欲を持ち、空の不思議を追求し、ともに喜び合う姿勢、それら教師のまることが本研究からこどもの本質を育てたことに何よりの成果を感じている。

文献

- 1) M. Montessori 吉本二郎・林信二郎 共訳『モンテッソーリの教育・六歳～十二歳まで』
(1997) あすなろ書房, pp. 20-22
- 2) Association Montessori International : 2013 Montessori International Congress.
<<http://amiesf.org/action/cornerofhope9.htm>>
- 3) 文部科学省日本ユネスコ国内委員会(2018)『持続発展教育 (ESD) の普及促進のためのユネスコスクール活用についての提言』, pp. 62-63
- 4) 同上, p. 112
- 5) J.A.L. シング著 中野善達・清水知子訳『狼に育てられた子』(1977) 福村出版
- 6) C.M. Trudeau, 奥山清子訳『モンテッソーリ教育における進歩・平和・人間の可能性』
(1988)
日本モンテッソーリ協会(学会誌), pp. 86-89
- 7) 前掲書1) p. 92-93
- 8) ソフィア・カバレッティ著 クラウス・ルーメル, 江島正子共訳(1998)『子どもが祈りはじめるとき』
ドン・ボスコ社, p. 92
- 9) マリア・モンテッソーリ著 クラウス・ルーメル, 江島正子共訳(1998)『子ども—社会—世界』
ドン・ボスコ社新版改訂版, pp. 66-67
- 10) マリア・モンテッソーリ著 小笠原道雄, 高祖敏明共訳(1975)『平和と教育』エンデルレ書店
p. 125
- 11) 同上, pp. 126-127
- 12) 大江ひろ子著, 西井麻美・藤倉まなみ・西井寿里(編著)(2012)『持続可能な開発のための教育 (ESD) の理論と実践第4章』ミネルヴァ書房, pp. 206-210